昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十七年四月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通巻第一五七号）

慈光

第十四巻　第四號

目次

歎異鈔に就いて……近角常観…（1）
近角常観先生を懐う……和才誠司…（4）
部落と浄土真宗……西元宗助…（5）
堂の鈴……佐藤強三郎…（8）
池山先生廿五回忌に……花田正夫…（12）
釈尊の生涯……福島政雄…（17）

歎異鈔に就いて

近角常観

世の一般青年、及び学生が信仰に入らんとするに当りて門戸を誤らざるものは稀なり、誤り易き点に二あり。

一には宇宙問題と関連して仏陀を思考する、宇宙の本体、これ仏陀にして、宇宙の現象これその作用となすが如し。

二には倫理問題に関連して仏陀を思考す。即ち宇宙の本体を仏陀なりと仮定して、これを行為の理想となし、標準となすが如し。

余は毎年夏期仏教講習会に出ずるを無上の楽しみとなす。恰も松島にて開催せる第七回夏期講習会までは、前述の如き宇宙の問題、及び倫理問題と如来とを関連せしめ、これを、尊くして過上無きの信仰と思いかため、常に人には善を為すべし、敵を愛するの心懸なかるべからずとしてこれを実際に行い来れり。

然るに世の中の人を見るに、我の如く行える者は一人もなし。自己はこれ位までに人に尽せるにも拘らず、他人は時としては、恩に報ゆるに怨を以てすることすらある。ここに於て、自己は従来の心持より一変して、却つて人の敵となるに至れり。

かくて煩悩懊悩癒ゆる処を知らず、誰か自己のこの悶える心中を洞察して、汝は罪人なり、至つて不愍なるものなりと、余に同情を寄する友人は無きかと、煩悶の結果、枕に就く身となり、親しき父母の慰めも、自分には何等の効なく、日夜転々、憂苦措く能わざりき。

これ従来の信仰の誤れるに基けるなりき。従来、宇宙や、倫理の問題と関係して得たりとなしたる信仰は、未だ真の信仰にはあらざりき。これ誤れる信仰にして、心内に描きたる仮定的の仏陀に対する空の信仰なりしものにして、未だもつて実世間の罪悪の渦中に沈淪せる吾人を、罪悪の渦中より救うこと能わざる信仰なりき。

誰か余に一人の同情者なきか、余は今日まで、人の為には名誉をも捨てたと。然るに世の中の人は皆自己中心なり。斯く思惟せる時、今日まで引立て遣りたる輩は、地位を変じて、余を引立つる様に見られ、嫉妬、憎悪の焔、炎々として、罪悪煩悩の魂となり了せり。

而もこれを如何にして解脱し、涅槃に入るを得べきか。

宇宙問題にてこれを解決せんとして得ず、倫理問題これを解決し得ず。誰か余とこの苦しみを共にすべきものはなきか？血に絶叫したる折しもあれ、突然、しかも静かに自己心内に不思議なる同情ある友人の入り来れるあり、誰ぞや、他なし、これ阿弥陀如来にてましますなりき。

余はここに実際に信仰を得たるなり。余の常に宗教は実験的ならざるべからず、と云うは、蓋しこの間の消息なり。実に釈尊は太子たりし時、生老病死の人生の実際問題の解決に苦しみて、遂に出家し給えり。釈尊成道の出発点は人生の実際問題に存せるなりき。生死の問題は学問の有無に関せず、将た貴賤、老若、男女、に関せず、一様に平等なり。吾人往生の用心は、宇宙問題にも在らず、倫理問題にも在らず、実に人生問題に在りて存するなり。

宗教とは絶対無限の如来と相対有限の衆生と、相関連する事なり。倫理的行為の理想なり標準なりと称する聖賢も、これ矢張り衆生たるなり。衆生と如来と関係しその心に於て融合す、宗教の有難味は、実にここに存するなり。

既に岸に登れるは如来なり。深淵に沈めるは衆生なり。慈悲溢れたる如来、如何にして深淵に苦める衆生を冷然と見殺しするに忍びんや。

如来ならでは与うること能わざるものを、余これを人に求めたり、而も得ず、却て嫉妬、憎悪に燃えたりき。余は敵を愛せんとしたり、然るに余は敵ならざる人を余の敵と見なしたるなり。我こそ真に敵なりき。この我を如来は愛し給うなり。真に敵を愛するは如来ならでは出来難し。吾人はこの如来の慈悲の力によつて往生を遂ぐるなり。他力信仰は即ちこれなり。

然るに他力信仰の用心、古来往々誤りを生ず。誤れる信仰に住するものを歎きて、正信に住せしめんとして書かれたるもの、これこの『歎異鈔』なり。

悪しきものを可哀想なりとて救うて下さるのだと思うべし。悪るくつても救うて下さるのだと思うべからず。又悪い者を助けて下さるのだから、成る可く善い行いをしなければならぬと思うべからず。如来の本願は悪しき者を救い給うにあり『歎異鈔』の要旨ここにあり。

因に『歎異鈔の』解釈法を説かん。

『歎異鈔』全十八章中、第九章は唯円房の自督にして、第十章は異義を出す。其他、第一章より第八章に至るものと、第十一章より第十八章に至るものとは、彼此相対す。大切の証文と云うは最初の八章、即ち、親鸞聖人の文を云うなり。御聖教とは『教行信証』のことなり。

初めの序に先師と云うは如信上人のことなり。而して此章の選述者は唯円房なりと知るべし。親鸞聖人の正統なる

信仰を伝承したる如信上人は六十二歳にして入滅し給いければ、後世その信仰の正統を失わむことを憂い給いて、血の涙をしぼりて記されたるもの、即ち『歎異鈔』なり。

次に『歎異鈔』の第二章、第三章に就いてその概旨を述べんとす。

第二章は、誓願に就いての心得を述べたるものにして、親鸞は誓願の理を知りて信ずるにあらず、如来の広大無辺なる慈悲の御心を頂きて念仏するより外になきなり、と申されたるが好く、如来誓願の道理を了解したればとて、真の信仰に入りたるにはあらざるなりと知るべし。

法然聖人は『選択本願念仏集』を選述し給えり。その意は、衆生には布施、持戒等の六度の修行の如きは到底なし得ざる難事なり。如来の御力のたのみとして往生を遂ぐべきは一向念仏の一行にありと教ゆるにあり。法然聖人四十三歳の時まで、種々の事を行じ給いしかども、未だもつて成仏の本懐を遂ぐる能わずと歎き給いける時、はからずもフト善導大師の著書に

『一心に専ら弥陀の名号を念じて、行住坐臥、時節の久近を問わず、念々に捨てざれば、これを正定の業と名づく彼の仏願に順ずるが故に』

とあるを読み給うて、忽ち念仏の一行を以て往生を遂ぐるの要道とし給いて、捨、閉、閣、抛、と決し給いしなり。

例せば、美服を着ても似つかぬ、又着ても直ちに汗にて汚すと云うが如きその子供に、手織の着物を与えたるが如し。子は親のその衷心を知ると雖も、これを身に着けずんば、未だ真の親心を受けたるものにあらず。誓願の道理のみを知り、以て真の信仰を得たりとする者かくの如し。

又、親はこの衣服を着よと命ぜり。しかも自分は他の美服を着るの資格ありと雖も、親の命令なるが故にこれを着る、自分は親考行なりと殊勝げに振舞う、これ亦以て未だ真の親心を受けたるものにあらざるなり。余は念仏宗なるが故に唱名すとて殊勝気に振舞い、真の信仰を得たりとするものにはあらざるなり。

如来の本願は、罪悪の衆生を救済し給うにあるなり。自分のために、こしらえたる御馳走は何ぞ徒らに遠慮して之を食せざるを得んや。中心喜んで誰もこれを頂戴すべきなり。然るに徒らにこれを遠慮し、又は何の感謝する処もなくこれを無遠慮に食する等のことは、これ未だ自分のためにこしらえられしという親切心を知らざるものと云うべし。その自分の為にこしらえられたる有難さを感謝しつゝ食らうは、これ真に食するものなり。

人よあやまつて邪信に陥るなかれ。『歎異鈔』の要旨とする所おゝむねかくの如し。

近角常観先生を懐う

和才誠司

私が近角常観先生に初めて御目にかかつたのは、日露戦争の始まつた、明治三十七年の四月、今から五十八年前である。

私の家庭は両親共に御法義を喜び、子供を宗教的に育て子供に信仰をすすめた。私は幼少の頃は両親にすすめられるまま仏様を拝んでいたが、中学校高学年になると、仏様を心から礼拝することが出来なくなつた。

両親はこのことを深く憂い、私も苦しんだ。私は中学校を卒業し、この悩みをもつて、明治三十七年春上京した。

東京にて如何なる人につき教を仰ぐべきか知らないから、東本願寺に尋ねたところ、近角先生への紹介状を貰つた。これを持つて先生をお訪ねした。

先生は温顔をもつて、初めて東京に出た田舎者をやさしく迎え、懇切丁寧にさとされた。お話しになることは、初めわからなかつたが、先生の暖いお人柄に触れ、お話の回数とを重ねる毎にひきつけられた。

陸軍士官学校に入学してからも、毎日曜日、欠かさずに求道学舎の日曜講話に出席させて貰つた。先生は同じことを、いつも〳〵操り返し〳〵懇ろにさとされるのが常である。もしこれが常の人であつたら、飽いて聴聞する気分になれないのであるが、先生のお話は、聞けば聞く程、わが身につまされて、深く感銘させられる。例えば、普通の歌手が同じ歌を幾度も繰り返せば飽きてしまうが、名人が歌えば、何度繰り返しても飽きが来ぬばかりでなく、歌を繰り返すほど聴衆が魅せられて、歌の醍醐味を満喫する。これと同じ様に、先生の同じお話が、私の魂に喰いこんでくる。

先生のお話は他人のことでない。私の心の底をえぐり、私の心がお慈悲の鏡に照らし出され、慚愧と感謝がこみあげてくる。単なる話、講義、説明でなく、先生の生の体験を真心こめて諄々とさとされるのである。

ある時、求道学舎の座談会にて『阿弥陀仏の実在』につき議論があつた。若い学生達の議論が沸騰した時、先生が『私が現に阿弥陀仏に逢つて来て、その話を常にしているのだ』と云われた。この一言で大議論が即時解決した。

先生の御講話は常に同じお話であるが、お尋ねすれば、

どこまでも深く詳しく納得の行くまで懇切にさとされ、特に、各個人の実際問題につき、徹底的に指導なされた。

私は学校卒業後、勤務地の関係で先生の膝下を離れたが、先生の地方講演、講習会等につとめて出席し、又著書、機関紙等を介して絶えずお指導を頂き、なお私一身上の出来事、実際問題に関しては、その都度御教示を仰いだ。

私は総てを生き仏様の先生に頼つていたから何等の不安もなかつた。お蔭にて今も同様である。御往生後の今日も御存命中と同じ心境にてお慕いしている。お存命中四十年間もの永い間、私は駄々を捏ね、先生はいつも〳〵お慈悲一つをお知らせ下され、今日只今も導いて下さる。

私の生涯を省み、最大の仕合せは、私の荒れた心に種子を蒔き、培い、熱をあたえ、水を注いで、信仰を育てて頂いた恩師近角先生に御縁があつて、そのお導きを受けたことである。かゝる愚かな、剛情我慢な、強慾な私が、今日細々ながら人生の生き甲斐を感じ、どうにか生きながえているのは、全く恩師の賜である。

私の居室に、恩師のお遺影を奉安し、朝夕静かに恩徳讃を称えるのが、私の楽しい日課の一つである。

昭和三十七年二月二十七日

部落と浄土真宗

西元宗助

わたくしが、わが国の所謂部落問題に関心をいだくようになつたのは、京都大学の学生時代からである。それはフトした因縁からであるが、その後、たえず念頭にあるようになつた。ことにペスタロッチーに憧れ、福島政雄先生のご指導のもとに、ペスタロッチーの研究に夢中になつていた当時のわたしは、もしかりにペスタロッチーが現代の日本に生きていたとすれば、かならずや部落問題にも深い関心をもち、その解決に努力したにちがいないと想うにいたつたとき、わたくしの生涯の仕事の一つが、ここにあると思うたことである。

他面、当時のわたしは、人を救うということどころか、この自分というものを全くもてあまして悶々としていた。し

かしそれは、当時、京都において盛んであつた親鸞会運動の希有のご縁にあうことによつて、一応の解決がついたようでもあつた。しかしまた、わたしの場合、情緒的陶酔的信仰に陥つてしまつていて、ここに当然あらたにひそかなる苦悶がはじまつていた。そしてあたらしく聞法求道せざるをえなくなつた。しかも、そこにはまことに良き善知識が用意せらてあつたのである。

池山栄吉先生にお目にかかつたのも、暁烏敏先生や金子大栄先生のお教えをきいたのも、そしてまた、足利浄円先生のもとに参じたのも、このころからであつたが、とくに福島先生のお世話になつた。それは、先生が在家の方であり、そのご信仰の歴程が、いわば私の経験しつゝあるものを通過し乗越えていかれた方であるだけに、彼岸というよりも此岸にあつて、このどこまでも迷つていく私を導き且つ先達となつて共に歩んでくだされたからである。このことについては、多くの語るべきものがあるが、いまは主題からそれるので、すべてを割愛しよう。

ともかく、仏法のお育てをうけ、浄土の大菩提心といわれる大信心海に生かさせていただいて、そのお蔭で、日本の農村問題・労働問題・婦人問題などの社会問題が、あらたに自分の問題になつてきた。そして必然的に部落問題の研究と運動にも関与することになつたが、そのことをいちばん喜んで激励してくださつたのが、まことに意外にも、足利浄円先生と花田先輩であつた。

殊に大正十一年、京都において全国水平社の結成せられたときの主意書等の印刷は、どこの印刷屋もひきうけないため、同朋舎印刷所を経営しておられた足利先生は、義侠的にこれを承諾せられ、そのため川端警察署に招致せられて取調べをうけられた前後のことなどのお話を、晩年の先生から直接うけたまわつたときは、驚きとともに感無量であつた。

なお、その後、部落関係のひとから、われらの仲間は同朋舎によくつかつていただいてお世話になつたとの話をきき、そのことを先生に申しあげると、〃たよりにされるのでネ〃と仰せになり、〃お僧さん仲間でも、どうかすると部落への布教を嫌がつて、申訳ないことです。西元センセイ、あなたが部落のことに力をいれてくださるンでたいへん有難いと思つています〃と仰せになられた。先生のご期待にそうほど尽力していない私は、ひどく恥しく思つたことである。なお、花田さんからも、お会いするたびに、お言葉をいただいて、ここに知己ありの感をふかくしている。

さて、部落問題がどのような問題であるかは、ここに詳説する余裕がないが、これを要約すれば、同じ人間であり、おなじ日本人の仲間でありながら、そして民族を異にするも

のでないことも学問的に明かであるにもかかわらず、過去の因襲と職業と、概して部落が貧困であり低教養であるために、四民平等となつた明治以後も、そして特に民主主義の唱えられるようになつた戦後も、依然として社会的に差別されることの多い我が国の少数同朋の問題をいうのである。それでは何故に、部落の人が、このように賤視せられるようになつたのか。その賤視観念の生じた最大のものは、一には、死を不浄として忌み嫌う日本古来の伝統的な観念（とくに神道）から、二には殺生を忌み嫌う過去の律法的仏教から、しかも中世以来部落の人々が主として皮革業であり、或は屍体を取扱わざるをえない職業に従事していたために、彼等部落のひとは社会的に忌避せられてきたのである。尤もそれを助長し強化したのは徳川幕府の政策による士農工商の封建身分制の確立であるが。

ともかく、こういうわけである。ところで、この部落の人々を真に救おうとしてきたものは誰であるか。もちろん神道ではない。神社はすくなくとも明治維新まで、部落の人は穢れたるものとして神域に近づくことを禁じた。ある神道の書には「屠児は神国に住むと雖も神孫にあらず、故に神まつることならず」とあるほどで、神道は部落の人々をば見棄てた。しかし、このように残酷であつたのは、ひとり神道だけでない、まことにイカンながら、旧仏教と雖も、概してその例にもれない。たとえば高野山も比叡山も、かつては女人とともに、部落の人を汚穢不浄の徒として山門に入ることを禁じている。

それでは誰が部落のひとを真に救おうとしたのであろうか。それは、いうまでもなく、親鸞聖人にはじまる我が浄土真宗である。〃善人なおもて往生をとぐ、況んや悪人をや〃という弥陀の大悲は、部落の人々こそが如来の正客であることをあきらかにした。そしてとくに、真宗中興の祖である蓮如上人から顕如上人にかけての数代の教化は、部落の人々をして、浄土真宗の門徒に転ぜしめていつたのである。尤もそれには本願寺教団と幕府との取決めによるものもあつたが。

じつさい蓮如上人の御消息の「ただ商いをもし奉公をもせよ猟漁もせよ、かかるあさましき罪業にのみ朝夕まどいぬる我等ごときのいたずらものをたすけんと誓いします弥陀如来の本願にてまします」（御文一帖第三通）というお言葉を、部落の人々がいかに感涙にむせんできたことであろうか。

しかし、その後におけるわれわれ浄土真宗の門徒は、はたして如何ような心がけで、部落の人々を遇してきていることであろうか。かえりみて、いろいろのことが想われて、ただお念仏申すことである。

堂の鈴

佐藤強三郎

五智の浜　三

その後、ある日、お藤は老父に送られて信哉を訪ねて直江津へ来た。老父は用事があるからとてすぐに外出した。

お藤「いくら誠実にやつても、周囲の人々にそれを認めて貰えません、本当に恨めしいことです。呪わしいことです。お小夜さんもひどいと思いますわ。私がこんなに苦しんでいるのに、まだ主人と交際を続けている。ホントにあきれた女です。呪い殺してもあきたりません」

信哉「それは御もつともの事です。そう思うのも無理もありません。然し他人の心は、こちらでどうして見ようもありませんからね。困つたことです」

お藤「主人も、前にはあんなに良い夫（おつと）でしたからね。それに、私もあなたが、いろ〳〵慰めて下さるものですから今日まで辛抱して来ました。今度は我慢が出来なくなつてしまいました」

と訴えた。その晩は宿で夜更けるまで語り合つた。翌日、信哉「急に一郎さんの心をどう変えてしまうことも出来ませんし、もうすこし辛抱して様子を御覧になつたら如何でしようか。前には良い御主人でしたのですからね」と慰められて、気を取り直して、しお〳〵と店へ帰つた。

その後お藤は一人でまた来た。

お藤「気のせいか、お母さんまでが、変な目で見ているようです。どうせ伜（せがれ）の気に入らぬ者なら、今のうちにいつそ別れてしまつた方が良かろうと考えているらしいので御座います。私は〈主人を救うものは私の外には無い、それは私の責任だ〉と意気込んだのですが、その意気込みもだん〳〵薄らいで来ます。それをどうして見様もありません。どうすれば良いでしようか」

信哉「何事も時機がこないと、なか〳〵定まりません。私は一郎さんもキツト苦しんでいると思います。互に苦しんでいるのです。男には意地もあり、力もあるので、女程眼につかぬのでしよう。私はあなたに無理を言うのでお気の毒ですが、もうすこし辛抱して見て下さいませんか。私にも考えがありますから……」

いろ〳〵話しているうちに、お藤はまた帰る気になつた。その後もお藤は一人で度々来た。

八月の末、いよ〳〵信哉も近くこの宿を引上げるという

ある日、お藤は一人でまた来た。

お藤「一時は死のうとまでしたものが、貴方様に救われて今日まで生きながらえてきました。いくら辛抱しても駄目です。今度こそもうこれ以上、我慢が出来ません。誠意を尽しても報いられず、周囲の人々には誤解され、おまけに、お小夜さんは積極的に、主人を引きつけて離しません。もう辛抱する甲斐がありません。人が恨めしい、世の中が呪わしい。この世の中には平和の場所は見つかりません。楽しい場所はどこにもありません。この上はどうせ生きていても何の望みもなく駄目ですから、いつそ死んで一郎さんの冥福を祈り、あの世で睦ましい夫婦になるのを待ちましよう。そして一時は、一郎さんも道連れにとも思いましたが、それだけは出来ませんでした。気の毒で……。

生きていても一郎さんと楽しく暮せる見込みもなく、明けても暮れても人に後指ささされて、財産を目当に、図太くねばつている、慾張り女だ、と見られているのです。おまけに、お母さんにまで、真心を疑われては、全く生きている甲斐もありません。子供もないので張合もありません。死ぬより外は無いと思います。」

と悲愴の面持ちである。

信哉はキツとなつて坐り直し、まともにお藤を見た。お藤は眼をそらさずに見返した。

信哉「そうですか。……死にたいですか。そんなに死にたい者を、私はどうすることも出来ません。死んだらよいでしよう。……。

貴女は人を恨むことが止まぬといわれるが、そんなに止まぬならば、いくらでも恨らんで見たらどうでしよう。いくらでも恨みたいだけお小夜さんを恨み、その上一郎さんを恨んで見たらどうでしよう。……。

貴女はます〳〵苦しむだけでないでしようか。……それなのにお小夜さんは、いよ〳〵手を引こうともせず、女の意地を通そうとする。一郎さんもまたかえつて意地になつて、お小夜さんの方へ引き付けられて行くかも知れぬ。お小夜さんも一郎さんも、腹の中では悪い、と知りながらも、いきおいに流されて、行く所まで行つてしまうかも知れぬ。世にはよくあることですからね。又、一郎さんと離別して次に他の人と結婚して見ても、又その相手が面白くないかも知れぬ。そうしたらその人をまた恨むことになるでしよう。かくして相手変れど、こちら変らず。それこそ何処まで行つても際限がないと思う」

信哉はお藤から眼を離さない。お藤は眼を上げていたが、次第々々に下を向き、膝の上でハンカチをいじつているばかり。波の音はザア〳〵とひつきりなしに聞える。

信哉「人を恨んで見てもそれで自分が幸福になれるでしようか。考えて見て下さい」

……　……

信哉「死んだとて、どこへ行くのでしよう。死んだとて気が楽になるでしようか。互いに思い、思われていたものが、身体を一緒にくくりつけて、海へ飛びこんで見ても、同時に息を引きとるとも限りますまい。身体は一つにしばつても、心は一つにならぬ。その上同じ所へも行けないでしよう。人の心は刻々に変ります。自分自身の心でさえ、朝に夕べをはかることが出来ない。これが人情の常です。一緒に飛び込んでも、片破れの一人だけが生き残つた例は、決して珍しいことではありません。

現に貴女方も、新婚当時は、水も漏さぬ睦じい仲だつたと聞いています。それが一寸のはずみから互に心が離れ数年のうちに溝が出来、次第々々に大きくなつて来たのでしよう。初めからこんなおそろしい気持はなかつたのしよう。

貴女が先に死んで、冥土で待つていても、一郎さんの心がそこへ引かれて行くかどうか……。また、そんなに世を果なみ、人を怨み、人を呪つて死んだものが、そのまゝ死んだとて、どこへ行くのでしよう。

只、滅茶苦茶に、何でもを死後に突きやつてしまうと云うおろかな仕打ちではないでしようか。その果が、あの世から又この世へ幽霊になつて出て来る位が落でないでしようか。

お藤の顔は見る〳〵青ざめ、唇はわな〳〵と震い、眼はふくろうの様に大きく開いた。口は時々ピク〳〵と痙攣し手はしつかりとハンカチを握りしめている。

信哉「貴女は一郎さんを救うのは、自分の誠意一つでやれる。やつて見せる。これをやり遂げてこそ生き甲斐がある、とお考えになつたことは実に尊い、立派なお気持です。

然し今は、それをやり遂げることも出来ず、その上意外にも人を呪い、死んでも死に切れぬと怨む様になつた。そして結局、一郎さんをこの世に残して暗闇へ一人で行くほかないでしよう。貴女は残念ながら生きて一郎さんを救うことも出来ず、死んで楽しむことも出来ず、実に味気ないことになつてしまつたわけです」

お藤は、ワ——と泣き崩れ、次第に声高く、髪ふり乱してシヤクリ泣いた。しばらくして、絶え〳〵に、

お藤「私は弱い女です。どうすればよいでしよう」

信哉「……本当の真実とは、事実をその通り見てくれ

るものです。そして何処までも呆れぬのです。……悪いとわかれば、人は呆れます。人は逃げます。これはあたりまえのことです。

然るに、悪い心が止まぬのを見て、それを気の毒に思つて、どこまでも同情してくれるお方であるならば、その悪い者を何処までもあきれないでしよう。

貴女は自分で誠をつくして夫を救おうとしました。それは実に立派な心がけです。然しそれが出来ず、ついに人を怨む心を起す様になつてしまつたのです。氷の様な心になつたのです。

貴女の思い通りに出来ないことは、実に悲しい、残念なことです。然し出来ないことは厳然たる貴女の事実です。本当の真実とは、貴女のその出来ないことをよく知り、それを憐んでくれるものです。その出来ないことを見ても決して笑いません。どこまでも同情して呆れません」

お藤はだん／＼静かになつた。

お藤「ホントに呆れないでしようか」

信哉「決して呆れません。実は、私もその有難い、不思議な真実を聞かせて貰つたのです。実に意外でした。

金剛石はガラスでは決して砕けないでしよう。私共の誠実は結局ガラス位のものです。石や鉄で叩けば砕けます

然し金剛石ならば、何物をもつてしても決して砕くことが出来ないでしよう。だから金剛石と云うのです。

本当の真実ならばいかなる悪をもつて向つても、それを呆れさすことは出来ないのです。……。

死にたいと思う心は、結局人目をさけたいからです。人目をのがれたいのは名利心のためです。人に見捨てられるのを恐れるためです。悪人は世に容れられたいから苦しむのです。死にたいのは、悪を恐れるからです。いかなる悪をも見捨てない、呆れないという真実を聞くならば、この世から強いてのがれることもいらぬでしよう。

生きて悪いものならば、そのまま死んでも悪いでしよう。死んだとて帳消しにはならないのです。そのどうすることも出来ぬ者を、憐れんで、その極重悪人を、どこまでも呆れない、救わずんばおかぬという、不思議の無碍の真実を聞かない限り、生きても死んでも、苦しみ抜けないでしよう……」

お藤「金剛石ならば、ガラスには敗けないでしようね」と、顔をやわらげた。

信哉「そうです。金剛石はガラスでは決して砕けない。私共の心は氷のな様ものです。自分では溶けられないのです。人を憎む冷かな心です。

然し、どんな冷かな堅い氷でも、それを溶かさずんばお

かぬ、止められないという無碍の光に照らされれば、遂には、必ず溶かされてしまうでしよう」

お藤はしんみりと聞いていたが、頭をコクンと下げてうなずいた。

信哉「七百年も前にお作りになつた、親鸞聖人の御和讃、

無碍光の利益より　威徳広大の信を得て
必ず煩悩の氷とけ　すなわち菩提のみずとなる

罪障功徳の体となる　氷とみずの如くにて
氷多きに水多し　さわり多きに徳多し

とあります。無碍光の慈悲により、如何なる悪業煩悩にも呆れたまわず、捨てたまわぬお慈悲により……かならず煩悩の氷とけ…と確信を以つて信仰して居られます。かならず煩悩の氷とけ……とね」

— つづく —

池山先生廿五回忌を迎えて

花田正夫

今秋は池山先生の廿五回忌を迎えることになりました。先生と御縁の深かつた先輩の念仏者達もすでに多く世を去られ、生命あつて本年の忌日を迎えます私共には、万感交々であります。

この際に、先生の遺された俳句や和歌などの類をひろいあげて、その前後の感話を誌して、先生の徳風の断片を御紹介申し、報恩になぞらえたいと思います。

衆生かわいや生死の海におのが罪から浮き沈み
久遠このかた子ゆえの廻向わたし一人をかた思い

この唄は大正十二年、先生の岡山の第六高等学校時代の末頃の詠であります。これは有名な親鸞聖人の常の仰せ「弥陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんと思召し立ちける本願のかたじけなさよ」のこころを詠まれたものであります。ここを先生は「信を行く旅人」に次のように述べておられます。

「衆生かわいや生死の海におのが罪から浮き沈み、というのは〈たすけんとおぼしめし立ちける本願〉のおぼしめしを詠みました。

生死の海とは、迷いの境涯であります。私共は、久遠の昔から、今日唯今にいたるまで、自分々々の縛られている業にひきずられて、迷いの境涯から更に迷いの境涯に輾転して、未来永劫の輪廻から脱することが出来ないのです。〈わが身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかたつねに沈みつねに流転して出離の縁あることなし〉とある善導大師の金言は、この自覚であります。

この何時までともはてしのない生死流転、六道輪廻の業苦を見るに見かねて、どうでもたすけないではならないと、いのちまで打込んで、思案に思案をかさね、工夫に工夫をこらしたのが、弥陀仏の五劫の思惟で、その揚句建てられたのが、超世の悲願であります。聖人は思いを遠くその由つて来たる源に馳せられて、それこそ罪悪深重煩悩熾盛の衆生、すなわちこの親鸞のためであつたのだと、深く〳〵感佩(かんぱい)されたのであります」

「久遠このかた子ゆえの廻向わたし一人を片思い、と詠みましたのは〈親鸞一人がためなりけり〉の無倦の大悲をよみました積りであります。

これも学生の一人が〈親鸞一人がため〉とあるのがわからないと度々たずねて居りました。そこで私も、この聖人の仰せに対応する、涅槃経の文〈一切衆生ことなれる苦を受くるも、ことごとくこれ如来一人の苦なり〉を思い浮べて居りました。

ここに百人の人が居るといたします。その一人々々は、人間として存する限り、何かあるのぞみをもつてるに違いありません。のぞみのある所に苦はついて廻ります。その苦とする事実は十人十色、百人百様であります。その一つ〳〵の苦は、当人だけではない、そのまま如来の御心にも感じられるのです。即ち一人々々違つてる苦は一つ〳〵別々に如来の御胸につきあたつて、如来の苦とならないのはないのです。如来の御胸にあたるのは、百人の苦を一括した総額でもなく、またその平均でもありません。百人がそれ〳〵抱いている百様の苦そのままなのであります。

如来は、百人を一括した一団にむかつて居られるのではない。直接に第一者にむかい、直接に第二者にむかい、直接に第三者にむかい、直接第百者にむかつて居られるのです。

国家が法律を制定するに当つては、必ずしも甲某、乙某の利害を眼中におかない。むしろ全体の上から打算して公平である、適宜であると思われるところに従います。即ちこの場合、国家のむかい合うものは、甲某、乙某の個人ではなくて、国民全体、またはその一部であります

これは今述べた如来対百人の関係とは、大いにその趣をことにいたして居ります。

試みに私と私の子供との関係を考えて見よう！私には五人の子があります。何だか知らないが、どれもこれも可愛い。長男も可愛ければ次男三男も可愛い。長女も可愛ければ、次女も可愛い。その間、ほとんど甲乙がないようです。従つてその一人の心配は、また私の心配となる。ここにおいて私は思う、その一人々々と私との関係は親子である、してみるとなるほど子というものは可愛いものだと。

ここで一寸注意しなければならないのは、もしこの子というものを、五人をひつくるめた意味に解すると、子は可愛いものと云うのは、長男が可愛い次男が可愛い、乃至次女が可愛いと云う事実から抽象した法則であります。子が可愛いから五人のものが可愛いのではなくて、五人のものが一人々々可愛いから、子供は可愛いものということに帰着するのです。

衆生という名目も、抽象的に解すると、一つの概念であつて、如来はこの意味の衆生にむかつていられるのではありません。如来のむかい給うは、古往今来、およそ生きとし生けるものの個々であります。たとえば〈如来は一切の為に常に慈父母と作りたまえり。当に知るべし、諸の衆生は皆是れ如来の子なり〉とあるにしても、ここに一切といい、衆生というのは、単に凡ての生物、又は人間などという概念的の意味ではなくて、一々の衆生の名の代りに用いた符徴(ふちょう)とみないではなりません。即ち甲某であり、乙某であり、丙某、丁某乃至この池山栄吉であるのであります。如来対衆生の関係は、衆生全体と如来とをつなぐ一つの線で結びつけられているのではなくて、無数の衆生対如来が線でつながつているのであります。〈罪悪深重、煩悩熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします〉その衆生とはこの池山栄吉であつて、この池山栄吉がたすかるのは、他の諸の衆生のたすけついでにたすけられるのではないのです。

この事態を言いあらわすために〈弥陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり〉とあるとしたら、それでもまだどこかに無理があるでしようか。否、これこそむしろ事実そのままの言いあらわし方として、最も当を得たものではないでしようか。このこころを当時、久遠このかた子故の廻向、わたし一人をかたおもい、と詠んだのです。

久遠の昔から苦悩の旧里に彷徨している私、如来の子である私のために、如来は慈父母として御心を痛め、やむにやまれず五劫の思惟に、救いの方法を案出されたので

あります。……」

たまさかに如来に面す春の風

この句は、昭和四年の春、甲南高校から谷大教授に転じられた時の作であります。私共京都学生親鸞会の同人十数名で、京洛の鍵屋の楼上に先生をお迎えし、歓迎会を催した時、最初に示された句であります。そして次のように説明せられました。

（以下編者筆録旧稿より）

私は今春住吉から京都に移つたばかりでありますが、まだ住吉に住んでいました頃、夕方犬など連れて散歩しました。そうした時、紫に紅に西の空を染めて夕陽の沈む荘厳な景色を眺めながら「あゝあの夕陽を拝むようなこころで如来を拝したいものだな」と、長い間憧れながら、毎日の私の生活は、何時も真反対で「自分勝手な問題を一杯前にかかえて居りながら、こうした者をおたすけ下さる」と、常に如来をうしろに廻してばかり居りました。

ところが、この不法懈怠な私が、不思議にも、今春になりまして二度ばかり、如来に直面させて頂きました。それかと云つて別に私が何か精進努力してそうなつたのではなく、向うから如来があらわれて直面させられたのです。

たまさかに如来に面す春の風

これがその時の駄句です。もとより俳句にもなんにもなつていませんし、からつきし駄目なのですが、妙に、年に二三度、こうした真似を、感ずることのあるまんまにさせられるのです。話が余談になりましたが、今日は、今春になつてから吹いてきた二度ばかりの春の風について話をいたしましょう。

その最初は、年頭に来た沢山の賀状の中から、部厚い一通の書信を見つけました。それは十年も前、六高時代に教えたことのある当時の学生の一人からでした。

「学生時代に信仰上の話を聞かせて貰つて居りましたが念仏も一向に申せないし、今一つはつきりと味わえないので苦心して居りましたところ、学校も卒え、社会人となつて、最近大きな人生問題に直面して、はたと行き詰り唯もう自分の愚かさと、罪深さを歎いて居りましたが。その時、不思議にも念仏の有難さが身に泌み、ようやく信界がひらけて参りました。そのよろこびのままに御礼状をしたためました云々々」

という礼状でありました。

かつて八歳旦に先ずおとずれし念仏かなＶと年頭の所感を述べたことがあります、歳旦、ふと目がさめてまだ家の者のたれとも言葉を交わさぬ先に、南無阿弥陀仏の訪れを

うけた感銘のままを句にいたしましたが、今年頭は、賀状の中からこの念仏の音信をうけて、心あらたに如来に直面する思いをさせられました。

その二番目は、この春亡くなりました私の三男の臨終の枕辺で、はからずも吹いて来た春の風であります。

私共一家が京都の紫野に移りまして以来、甲南高校生の三男を住吉の懇意な家に預けていました。先日私が挨拶かたがた住吉のその家に行きますと、丁度外から帰つた三男の顔がすこしむくんでいるので、早速医師に診て貰いますと、腎蔵炎であるが、二三週間も安静にすれば大丈夫とのことで、安心して私は京都に帰りました。

ところが、数日後、病気が急変して重態との報せで、急いで子供を見舞いますと、附近の同信の方も来ていてくれましたが、医師に模様を聞き、病室に入りますと、すでに神戸の長女も枕辺に寄りそうて、種々介抱をして居りました。とても身体のいたるところが痛んでならない様子でありましたが、私の顔を見るなり、

「お父さん、今度はどうも駄目のように思います」

と自分で死を自覚している様子でしたから

「お前はそう思うかね。まだよくわからないが、そうかも知れないね。考えて見るとお母さんが亡くなつてからもう何年になるかね。若し駄目だつたら、お母さんがきつと待つているよ。お父さんもおつつけ行くよ……」

と話すと、異常に真剣な面持で聞き入つていましたが、

「私は、正しいと信ずることは心残りなくやつて来ました。思いのこすことはありません、……けれど、こんなに早く駄目になるとは思いませんでした。…今となつては、ただ念仏だけです」

と言い終ると同時に、何十年も前から念仏申していた人の様な調子で、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、と続けさまによどみなく念仏申し始めました。

其日は、枕辺に私も坐つて、長女と共に、足腰をさすつて居りましたが、次の日の朝、

「今朝はすつかり苦痛がなくなりました。気分も晴々して、身体も楽になりましたから、手を休めて下さい」

と、病み疲れてはいるが、晴れやかな顔をして、静かに念仏していました。そこで私は

「今隣室で、東京の兄さんが輸血の準備をしているから苦痛でもあろうが、しばらく辛棒して、輸血をして貰いなさい」

と云うと、

「有り難う御座います」

と素直に答えて、相変らず念仏申して居りました。私はこ

の三男の姿に心うたれて
「世の中に、親と子の、生別、死別の悲劇が沢山繰り返されているのに、こうしてお前も、お父さんも、安心し、満足して、十分に別れを惜しむことの出来るのは、幸福な親子だつたね」
と申しますと
「みんな、お父さんのお蔭です」
と微笑を浮べて答えました。つきぬ名残りを一家そろつて惜しみ合いながら、やすらかに息を引きとりました。
生前はどちらかと言えば唯物論的、反宗教的な思想を持つていましたが、平素、何時ともなしに聞いていた念仏が臨終にひらけたのです、念仏のしみこみです。
私はその枕辺に坐りながら、自分で死を自覚して、やすらかに帰するが如く念仏往生をした我子の姿を見護りながら、横着で、罪深く、剛情な私の様な親に、よくも、素直で正直で、清く美しい、こんな尊い子が恵まれたものだ、と且つ謝し、且つ慚しながら、我子でありながら、我子ならぬ尊いものに深く心うたれました。
これが最近に、我児の上に、如来に直面させられた春の風でありました。

未完

釈尊の生涯（二）

福島政雄

因縁のおさとり

そうして、その釈尊があんなにして覚りをお開きになつたその覚りの中心と言うものは、因縁と言う問題であると言うのであります。この因縁と言う言葉は、私共日本人は毎日のように使つている言葉でありますけれども、存外軽い意味に使つております。けれども釈尊がお覚りの上に於いて因縁と言う事に徹底なさつたと言う方面のお心持をうかがつて見ますと、「因」と「縁」と言うもののけじめを非常にはつきりとなさつたわけであります。人間を始め一切天地万有というものを因縁と言う根本の見方から眺めて、そして一切は因縁の所生（しょしょう）というところから一切来ると言う事になると言うのでありますが、その因と縁とをお分けになる、それが自然科学、西洋から来る自然科学で申しますところの因果律なんかとは非常に違うと言う事がはつきりさせられてあるのであります。どうも因果律と言うものは、その因果と言う関係をどうも色んなものを混合して粗雑に見ている。所が、釈尊のお覚りの因縁観と言うものは、因と縁とをはつきり分けて、喩えば私なら私がこの世に生れて来るのに、私の父母の結婚と言う事が縁となつて私と言うものが生れて来るのでありますが、その生れて来る根本の因と言うものは、父母にあるものじやない。私自身にある。そこを自然科学の因果律では何か一しよに考えてしまつて、自分がこの世に生れて来た原因は父母の結婚にあると言うような、非常に粗雑な考え方であつて、根本の因と言うものに目が覚めていないのである。根本の因と言うものは、今日こう言う風にいのちを受けて生きております私自身にあるので、その根本の因と父母の縁と言うものが因縁和合してこの世に出て来るのである。その根本の因と言うものが自分にあると言う事を知らないものだから、自分が生れて来たのを非常に不平のある者なら父母を呪つて、自分がたのみもしないのに親が生んでくれた、こう言う風に思うのは非常な間違であつて、因と言うものは自分自身にあると言われる。そこの心持は私にも少しわかるようであります。
御存知の通りに仏教では前生又前生と言う事を言われる。何も前生を見て来た訳ではありませんけれども、自分の存在というものの根本を深く感ずれば感ずる程、自分自身の久遠劫来の業と言うものがそこに因となつて、そこに父母と言うものが縁となつて自分と言うものが生れて来たのである。だから縁であるところの父母に向つて感謝するのが本当である。そして自分自身に何か困つた事悪い事があると、自分の根本、久遠劫来の業の因、業因（ごういん）というものによつてそう言う事になつていると言う、そこに目が覚めないから、人生と言うものをいい加減に感じている。従つて父母の御恩と言う事も感じないでいると言う事になる。ここの因と縁のけじめをはつきりなさるのが釈尊のお覚りの中心問題であると言うのであります。これはまあ御承知の善導大師のお言葉、
「自らの業識（ごうしき）を因として父母の精血を縁として因縁和合するが故にこの身あり」
と言うあのお言葉は非常に大事なお言葉であります。釈尊のお心持を人間の上に於いて感じておいでになります大事なお言葉と私も前から感じておるのでありますが、因縁和合してこの身ありと言う事を私共殊に日本人としては千三百年来仏教のお蔭を蒙つておりますから、そう言う所ははつきりしないと嘘である。そこをはつきりしないでいい加減な因縁観を持つていたならば、その因縁観そのものが非常に浅薄になる。釈尊の成道の御心持に決して添わな

い事になると言うような事を感じて行かなければならぬと言う事を私自身感じますのであります。非常に因縁観と言うものが深い大事なものになる。人間の存在ばかりでなく、天地自然一切法の上に、その因縁観を以て釈尊が一切法を御覧になるようになつた。そこに釈尊の御覚りと言うものがある。こう言う事が御覚りの中心問題でありますから、そこから例の十二因縁と言うものがあらわれて来るのであります。

十二因縁

先ず無明がある。それから行、おこない、業と言うのも同じでありましよう。そこに識、心の根本であります。それが名色と言いまして身体と精神と言う事にあらわれている。その身体と精神とを具えたものに六入と言つて六つの窩と言いますが、入口がある。眼耳鼻舌身意であります。そうするとそれによつて触、ふれるのであります。外界のものに眼で耳で触れる。触れるとそこに何か感ずるのであります。受、感じ受ける、それについて快不快の感じがともなうものであります。こう言うものに心触れて、こんなものを見て、聞いて、快く感じたとか厭に感じたとか、愛であります。触・受・愛であります。そうすると快く感じたものに執着が起る、それが取であります。執着が起るとその自分が執着しているものが何時迄も何時迄もあるような間違つた考えを起す、それが有の見と言うのであります。そう言うことであつてそこに我々の生命と言うものがありますけれども、いずれ老病死であります。歳をとつて病気をして死んで行く、そこに我々人間の姿と言うものは、無明から始つて老病死で終るものである。今何だか頭の調子で順序を違えているかも知れませんけれども大体そう言う事であります。それがお覚りの上に感ぜられるところの人生の相であります。

そこで、それじやそういう無明に始まり老病死に終わる迷の世界でありますから、迷の世界のままでいいのか。迷の世界が迷の世界と感ぜられるようになれば、覚りの方向への第一歩にはなるわけでありますけれども、それだけでは本当でない。迷の世界が迷の世界とわかつて来るのは、そこに正しい道と言うものがあらわれたからそれがわかつて来たのである。それで四聖諦の苦集滅道と言う問題になるわけであります。この世は苦しみばつかりであると。これは皆さん仏教のお話をお聞きになつていますけれども、仏教と云うものに触れていない人は、仏教と言う教は消極的でいけないと。こんな方もあるようでありますけれども、実際この人生では楽しみと思つていたつもりがやがて苦しみなのであります。私自身の小さな経験でもそう言う事を感ずるのであります。非常な楽しみと思つていたの

が皆苦しみになつて行く、これは現実の人生というものはそうなのであります。いくら財産があつてもいくら名誉を得ましても、どんなに権力を握つても、結局それが苦しみになるわけで、その苦しみを無くさなければならぬ。それにはその苦しみと言うものが何によつて起るかと言う事を見究めなければならぬ。それが即ち苦集滅道の集で、集と言うのは煩悩の集りである。煩悩の集り、自分が煩悩の塊であるが故に其処に人生は苦しいと言う事になつている。だからその煩悩による苦しみを滅せねばならぬ。その滅すると言うのが今申しましたように、その苦しみの煩悩を叩き潰して無くすると言うのじやない。滅すると言うのは転ずると言う事であります。

八正道

併しその転ずる道と言うのは八正道、八つの正しい道がある。正見、正しい見識と申しますか。正思惟、自分の感じ、思想というものを正しくすると言うのであります。それから正語、自分の言葉を正しくする。それから正業、正しいおこないであります。それから正命、これは自分の生活を正しい生活にする。それから正精進であります。正しく道に進んで行く。それから正念、心の深い奥の奥までを正しくすると言う事でありましよう。そうして正定、自分の心を根本から正しく落ち着けると言うような事でありましよう。この八正道によつて煩悩を転ずる。転ずる事によつて人生の相が転じて来る。こういうみ教、つまり十二因縁、四聖諦、八正道と言うような事に釈尊の菩提樹下に於ける御覚りと言うものがあらわされている。併し中心になるものは始め申しましたように、因縁と言う事をこまかに正しく感ずるようになること、こう言う事なのであります。もつとも私自身がこんな事が出来る訳でありませんから、本当のところを言えませんのでありますが、大体がそんな事でありましようかと思うのであります。

現実苦の問題

このようにして、釈尊の御覚りと言うものは哲学上の六つかしい事を考えると言うのじやないのであります。やたらに哲学上の六つかしい事を考えると言うのは、空中をくるくる廻つている。そんなのでなくて、現実の人間の苦しみがどうなるか。この苦しみの根源を無くさなくちやと、これが痛切な問題なのでありまして、それは御承知でありましよう、釈尊の毒矢の喩にはつきりあらわれているのでありまして、たとえばいくさに行つて自分の身に毒矢が当つたその毒矢を友達が抜いてやろうとすると、ちよつと待つて下さい、この毒矢は一体誰が射かけたものか、この矢は何でこしらえたものか、この毒は一体何の毒か、こう言

う事をすつかりわかつた上でないとこの矢は抜いてもらう訳に行かないと言うたならば、その内死んでしまうじやないか。問題は毒の矢を抜く、それが大事な問題でその他のそんな事を研究しなければならないと言うのは閑問題だとのお喩にありますように、釈尊の御心の向き方が現実の苦しみをどうするのか、現実のこの人生がどうなるのか、現実の宇宙全体、自然全体を我々が感ずる上の大事な中心問題を解決するのであつて、宇宙に限りがあるとか無いとか、人間は死んでから魂が何処かへフラ〳〵と行くか行かないかとか、そんな事を考えるのは閑問題だと言うのが、釈尊のお心持でありますから、現実について離れない大事な所を目指しておいでになるのでありまして、だから私共が仏教と言うものを考えますについて、華厳の哲学はどうだの、天台の哲学はどうだの言うような事を、又今度は教行信証の哲学と言うような事を考えていらつしやる方があるが、そう言うのは第二の問題である。こう言うのが釈尊の覚りの御心持であろうと思いますのであります。

帰依の人々

だからそう言うところからして釈尊はその御覚りの心持を最初に今の五人にお説きになる。釈尊におつきして来て、ゴータマは堕落したと言つて向うへ行つてしまつたその五人の所に行つてお説きになる。これはお聞きになつている事でありましよう。五人がゴータマがやつて来たら無論お辞儀もしないしものも言うまいじやないか、あんな堕落したものにと申し合せていたけれども、釈尊が覚りの御心持が開けて歩いておいでになると、非常にその御姿に先ず打たれた。そこで申し合せた事は消えてしまつて、釈尊の前に皆で頭を下げなければならんようになつた。そこで最初の御説法があつたと言う事になつています。そこでこの五人が手始めで出家の修行者となるわけであります。

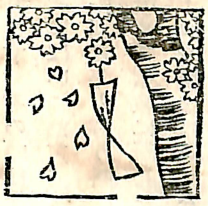
その後御承知のヤシヤと言う青年は在家の信者となり、その両親妻も皆在家の信者として釈尊のみ教を聞く。それからビンバシヤラ王はもう釈尊が覚りをお開きにならない前から、この方は尊い方だと言う事を感じて、〃覚りをお開きになりましたらどうぞこの私を済度して頂きたい〃と言つていた方でありますから、このビンバシヤラ王も釈尊に帰依なさる。ハシノク王も帰依なさる。それから出家のお弟子の舎利弗・目連、これはもと〳〵親しい友達であつたのをサンジーヤと言う外道の所で修行していたのが、どうも物足りなくなつて結局二人共釈尊のお弟子になつて、そして舎利弗は智慧第一と言われるようになりますし、目連は神通第一と言う意味は非常に意志の強い人でありましたからその方面で優れた人。大事の所を説く時になると舎利弗は釈尊の代理で説く事が出来る。目連の方は釈尊の教団がだん〳〵人数が多くなつて来る、それを統一し統率して

行くと言う方面に非常によく働らいた人。こう言うように優れた出家のお弟子と言うのが出来る。それから次々に大財産家ギツコドク長者と言われます。祇園精舎を建立してお弟子達が一しようにいる場所として釈尊に差し上げた、あゝ言う大福長者も釈尊に帰依するかと思えば、社会の一番下層に位していたところの人も釈尊のお弟子になる。つまり釈尊に於いて始めて印度の厳しい階級制度と言うものが、信仰の上から打破せられて、この釈尊の教を聞く上ではどの階級は駄目だと言う事は決してない。上の階級も下の階級も皆平等に釈尊のみ教を聞く。そこが仏教が印度の社会に大革命を起した。

印度の新仏教

それは昔ばなしのようでありますけれども、この御本(大類純著「釈迦」)の序文を見ますと、最近であります一九五六年でありますから今から五年前、釈尊の二千五百年のお祭であります。その時にアンベーデーカル博士と言うこの方は仏教にはいつた方であります。この方の感化でその釈尊の二千五百年と言う時に今迄印度教の信者であつた人十万人が改めて仏教に転じた。それから二ケ月程たつてアンベーデーカル博士は急になくなられましたが、そのお葬式の場で又十万人仏教に帰依する人があつた。その後各地で又段々はいつて来てもう三十万になりました。新しい仏教徒であります。そして今では五百万人迄にすると言うような心持でその人達が新しい仏教を伝えておる。そして今の印度のネール首相は、この人は未だ仏教が本当にわかつていないのだそうでありますけれども、矢つ張り仏教にある程度の理解、仏教を大事なものとは思つているそうであります。そう言う事からしてネール首相を上において、新しい仏教徒と言うものが段々広まつて行つて、ここから全世界の平和と言う事を願うと言う運動になつて来ると言うような事を、私も始めて知つたのでありますが、今でも印度は階級の差別が六つかしいそうであります。新しい仏教にはいつているこの人々は大低社会の最下の階級の人々であります。それが仏教にはいつて釈尊の御精神のように如何なる階級の者も平等であると言う事によつて今動き始めている、そんな事であります。二千五百年前の事じやなくて、今現実の社会を仏教が動かしていると言うような事でありますからして、それならば日本国民と言うものは聖徳太子以来千三百年間仏教のお蔭を蒙つていて、それていて印度ではそう言う動きがあるのに、仏教徒は何時迄も睡つたようにしていていいのかと云う問題が其処にあるのであります。

未完



あとがき

仏誕生の聖月を迎えました。仏生会が甘茶の供養の中に花御堂を中心に全国各地で行われていることでありましよう。私達仏教徒には、秋の報恩講と春の花祭りが、一番明るく楽しい行事と思われます。

いのちあり今日あり花の吉野山

という古句がありますが、

いのちあり、今日あり仏の誕生会

とも相通ずるのではないかとさえ思われますのは私一人でしようか。

△八旬をこえられました和才翁から原稿を頂き近角先生の徳光の断片を伝えて下さいました。

△又西元宗助様から部落と真宗という寄稿を頂きました。この問題は私共の一人々々の悲しい問題として深く省みさせて頂きたいことであります。西元様の著書として、「部落問題と同和教育」、東京、創文社刊行、定価七百五十円也。「同和問題」京都市下京区正面鳥丸東、法藏館刊行、送料共、実費八十円也。があります。

△本年は地山先生の廿五回忌をお迎え申すことになりました。私自身まず先生の御歌を想い浮べ、それにちなんで先生をお慕い申したいと存じます。先生の歌は、唯なる歌でなく、その当時の信境をコンデンスされ醗酵されて、自然に音律をもつて発表せられたものであります。近角先生にも沢山の漢詩が遺されてありますが、生々として躍動する信のおのずからなる発露かと存じます。

聖人の御晩年、浄土の音楽とでもいうものがきこえ、それが沢山の和讃となられた、と福島先生も仰言つていられますが、同じ心境かと遙察いたします。

筆者の住所

東京都世田谷区上北沢三丁目一三一二　福島政雄

福岡市大坪町二丁目四八　和才誠司

京都市下鴨蓼倉町六八ノ一　西元宗助

新潟市関屋堀割三ノ十一　佐藤強三郎

御案内

○毎月第一、二、三日曜、午后一時半、講話会。一道会。
市電、新郊通一丁目下車。東入ル。

○毎月廿四日、午前、午后、市内小桜町、教西寺、法話会、
市電、御器所通下車。市内バス北山町下車。

○四月廿五日。尾西市三条板倉、蓮光寺。蓮師会。午前、午后。

定価　一部　二十五円（送共）
半年　百五十円（送共）
一年　三百円（送共）

編集・発行人　名古屋市南区駈上町二ノ八八　花田正夫

印刷人　名古屋市千種区千種町馬走二八　本田政雄

発行所　名古屋市南区駈上町二ノ八八　慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番